

大使コラム（2011年6月）

6月、リスボンでは観光客の姿が目立つようになりました。この一月あまり、街のあちこちで人々の目を楽しませたジャカランダの青紫の花も見頃を過ぎ、代わってブルーゲンビリアや夏の花々が目立っています。また、名物の鰯の炭火焼きが、既にリスボンの至る所で香ばしい薫りを流し、旅人だけでなく地元の人々の食欲も誘っています。

日本と並んで魚の消費量の大きいポルトガルでは、多様な魚介類が楽しめます。特に干鰯を使う料理は種類が多く、当国の方々に食事に呼ばれると新しい干鰯料理にお目にかかります。欧州でも北の海で採れるこの魚が、南欧のポルトガルで国民料理になっているのも興味深いことです。

食文化と言えば、この国に来てポルトガル・ワインにも関心を持ちました。以前は、甘口のポルト・ワインか微発泡性の「マテウス・ロゼ」くらいしか日本では知られていませんでした。しかし近年、ポルトガル・ワインの質が向上し、日常用だけでなく前回の「コラム」で書いた「マデイラ・ワイン」も含め、高品質の特徴のあるワインが各地で生産されています。先日も、リスボン近郊のローレス市を訪ねた際、名産品の白ワインの醸造所にも案内されました。首都圏にもワイン産地があるのに驚きました。当国外務省が外交団を南部のワイナリーに案内し、ワインの売り込みにも努めているほどです。前任国を離任する際の挨拶で、彼の国の大統領がポルトガルの「ヴィーニョ・ヴェルデ」（若摘みブドウで作った微発泡性の、主に白ワイン。）に言及したのも記憶に残っています。ポルトガル・ワインは、質の高さの割に値段が手頃なので、もっと日本でも知って頂きたい一品です。

当国各地を訪問して印象的なことの一つは、地方開発の問題です。西欧の中でも経済発展が遅れていた当国は、1986年のEC加盟以来、その援助も受けて高速道路の整備などには成果を上げてきました。最近も高速鉄道網、首都の新空港、テージョ川の新横断橋などの建設が検討されましたが、EU、IMF、ECBからの財政支援の条件として、一部の高速鉄道を除き、新たな建設計画は凍結されました。首都だけでなく地方都市の整備も遅れているところが多く、EU（および政府）の補助金を受けて地方開発も進められてきましたが、これも2013年に終了し、現下の財政事情では後が続かないケースが多いでしょう。この国の産業の90%以上が零細企業であり、地方に存在するこれら企業の競争力強化なくして、この国の経済の将来は厳しいと言わざるを得ません。まずは財政問題の解決に努めるとしても、より根本的な問題解決には前途多難です。

この長い道のりの第一歩が、国際社会の支援を受け、着実に政策を実行できる安定

政権の確立です。長い選挙戦でしたが、ようやく5日に国会議員選挙が行われます。世論調査や大方の見方では、議会の過半数を制する政党はなさそうです。その場合、政権成立のプロセスにまた時間がかかることも予想されます。ユーロ通貨制度や国際経済の安定のためにも、選挙結果とその後の政権成立の次第を注視していきたいと思っています。

時節柄、皆様にはご自愛のほどをお祈りいたします。